

仙台市文化財調査報告書第12集

昭和51年度

**史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報**

(北側および東側墳麓、周辺ならびに後円部断面)

昭和52年3月

仙台市教育委員会

〈正 誤 表〉

P	行	誤	正
4	上 6	仙台市遠見塚	仙台市立遠見冢
8	写真 7	(写真交換)	
11	下12	墓 括	墓 埠
〃	下 8	〃	〃
12	上 3	〃	〃
〃	上 4	〃	〃
〃	上 6	〃	〃
〃	下 9	〃	〃
〃	下 8	〃	〃
15	下 8~7	やはり沈線で区画された もので…交互にくりかえ すものがある。	そうでないもの がある。
19	下 8	盃掘括	盃掘埴
〃	下 5	墓 括	墓 埠



写真 7 粘土標検出状況（右側）

仙台市文化財調査報告書第12集

昭和51年度

**史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報**

(北側および東側墳麓、周濠ならびに後円部断面)

昭和52年3月

仙台市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は仙台市遠見塚一丁目所在、国史跡遠見塚古墳の昭和51年度環境整備第二次予備調査（北側および東側墳麓、周溝ならびに後円部断面）の概要報告書である。
2. 本書の内容は、発掘調査の経過、学術的記録と若干の考察を含む。
3. 本文の執筆分担は以下の通りである。

岩　渕　康　治………1、2、3-(イ)、4

田　中　則　和………3-(ロ)

結　城　慎　…………3-(ハ)

図面の序書等は上記三者が分担し、編集には岩渕があたった。

なお、監修を伊東信雄氏（仙台市文化財保護委員）にお願いした。

4. 今回の調査に関しては、現地説明会資料を発行しているが、記載内容等に差異があれば、本書記載をもって優先する。また今回の調査に関する追加、訂正事項などがあれば、環境整備事業完了時における報告書において公表したい。

## 目 次

1. はじめに	1
2. 調査計画とその経過	1
3. 調査内容	4
(1) 後円部をめぐる周辺の状態	4
(2) 後円部中火断面の所見	8
(3) 出土遺物	15
A. 土器類	15
B. 石器類	18
C. 鉄製品	18
4. まとめと考察	19

## 写真目次

写真1 現状写真	2
写真2 後円部断面調査風景	3
写真3 第6トレンチ調査全景	7
写真4 第7トレンチ周辺内縁部	7
写真5 後円部断面表土排除風景	8
写真6 粘土層検出状況（北から）	8
写真7 粘土層検出状況（上から）	8
写真8 東側粘土層	11
写真9 西側粘土層	11

## 挿図目次

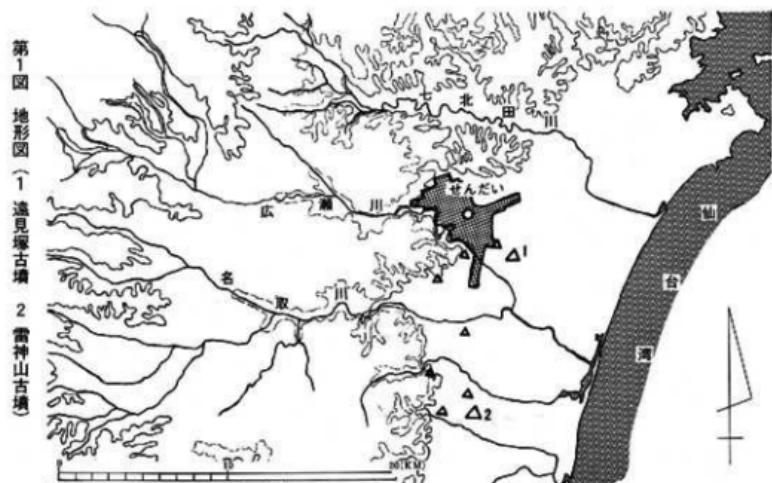
第1図 地形図	1
第2図 遺見塚古墳現況実測図およびトレンチ配置図	5・6
第3図 第7トレンチ断面図	9・10
第4図 後円部墳丘断面検出粘土層実測図	13・14
第5図 出土品実測図	16

## 1. はじめに

史跡遠見堀古墳は、仙台市遠見塚一丁目23-10他地番に所在する。昭和43年11月に国の史跡としての指定を受けている。指定地域（面積16,547m<sup>2</sup>）は昭和48年度までに全域公有化が完了しており、昭和50年度からは仙台市教育委員会によって国・県補助による環境整備事業が開始されている。その環境整備事業の基礎的データの収集のため昭和50年度来、一連の発掘調査も実施されることになったものである。環境整備事業の運営ならびに発掘調査の実施にあたっては仙台市文化財保護委員伊東信雄、氏家和典両氏の指導、助言を頂いている。

## 2. 調査計画とその経過

遠見塚古墳についての発掘調査は、今回の環境整備事業以前は正式には一度も実施されたことがない。ただ昭和22年に進駐軍による霞ノ目飛行場整備の為の土取りによって、後円部北半部が削除されて粘土櫛が出現した際に、伊東信雄氏がその状況を観察され、考察も加えて昭和25年に報告されている。（『宮城県文化財調査報告書第1集所載「遠見塚古墳』昭和25年）これによって、本古墳に関する基本的な所見がおおむね明らかにされている。すなわち、①形態規模は若干歪みが見られるが、ほぼ「柄鏡形」と呼ばれる、前方部が低く細長い前方後円墳で、主軸の長さは110mでこれは県内第2位、東北で第3位の規模である。②内部構造は長軸に平行する粘土櫛が2基あり、内部から木棺の残片と思われる木片、朱および副葬品と思われる土簡



器蓋が発見されたが、それ以外は何も発見されなかった。③葺石とか埴輪は確認されなかつたが、墳頂粘土層付近に玉石が確認されている。④古墳の造営年代は出土の土師器壺および群馬県稻荷山古墳との類似性などから西暦5世紀前後であろう。

今回の環境整備事業における発掘調査の方針としては、以上のような所見を基本的な学術的所見としてふまえた上で、その補足ならびに現状確認を行うこととした。すなわち、①周辺の有無ならびに形態、規模の確認、②後円部断面の現状確認、③その他、墳形の歪みや西側の壇の実態確認、などの解明が調査の方針であって、この方針外の全面的な調査は行わず、できるだけ現状のままの保存を整備の目標としている。調査は、古墳周辺を中心に昭和50年度から3ヶ年計画で実施することとした。昭和50年度は、発掘調査に先立ち詳細な現況測量図を作成した。(200分の1、20cmセンター、レベル記入：作成パシフィック興業株式会社：トラバース測量)

発掘調査は、古墳西側周辺に3つのトレンチ(面積200m<sup>2</sup>)を入れて実施した。その結果、①本古墳の周囲には、後円部西で幅21m、深さ2.6m、前方部西で幅20m、深さ最大4.3m、中間部西で幅41m、深さ3.6mの周溝の存在が確認された。形態的には「馬蹄形周溝」といわれるものに属する。なお、深さについては、前方部西以外は部分発掘のため再検討の余地が残っている。この周溝について環境整備事業着手前にも赤外線航空撮影などで確認を試みたがはっきりした成果は得られなかった。これは地山と埋土の土質がきわめてよく類似した河川性堆積土(シルト)であったためと考えられる。

写真1 現状写真(南方より撮影)



②古墳西側の墳形の歪みと壇の実態については、墳丘が近世以後に一部削除され、その削除した部分からの土で壇を作ったものであって、古墳に直接関連する遺構ではないことが判明した。またこれによって、前方部が從来細長いとされてきたのも後世の人為的削除の影響を多分に考慮しなければならず、古墳の基本的形態に若干変動を生じる可能性が生まれた。

③古墳の西南周縁部にて弥生式土器包含層が確認された。

④出土遺物では、墳丘部分からの弥生式土器、石器の出土が目立った。弥生式土器は大泉式、樹形圓式、桜井式の各型式のものがそろっている。土師器では南小泉式、栗圓式などの他、ロクロ使用のものや、須恵器の破片も若干出土した。他に注意すべきものとしては、埴輪に類似する凸帯ある朱塗土器片があるが、検討の結果埴輪として該当するものがなく、薄手でもあり、土師器の一種であろうと考えられた。（以上「昭和50年度史跡遠見家古墳環境整備予備調査概報」所収）

昭和51年度は、古墳周縁北側および北東部と後円部中央断面の現状確認を行った。（調査面積約370m<sup>2</sup>）

▽調査期間：昭和51年7月19日～9月10日（延42日）

▽調査主体：仙台市教育委員会

▽調査指導：伊東信雄（仙台市文化財保護委員）

　氏家和典（仙台市文化財保護委員）

▽調査担当：仙台市教育委員会社会教育課文化財係

　（前課長）青木 薫

　（課長）永野昌一

（文化財係主幹）

佐藤 恰

（文化財係長）

畠山重光

（主事）鈴木高文、岩

渕康治、朝倉秀之、

田中則和、結城慎一

（嘱託）大泉重治

▽調査参加者：斎藤秀寿、

　瀧口卓、柳田俊雄、

　八島良晴、川村正之、

　石黒伸一朗、針生修



写真2

後内部断面調査風景

二、日野界、岩渕正一、金子敏久、小山薰、目黒茂之、森剛男、萱場靖、遠藤さとし

▽調査協力：太田昭夫（仙台市立金剛沢小学校教諭）

加藤貞子（仙台市立西多賀小学校教諭）

藤沼邦彦（東北歴史資料館研究員）

仙台市遠見塚小学校

萩野T.務店

▽整理補助：高橋春美

### 3. 調査内容

今回の調査目標は、

- ①昨年度占墳西側で確認された周溝が北側および東北部でどのように確認されるか。
- ②昭和12年の土取りによって半分削除された後円部中央の断面ではどのような所見が得られるか、などである。今回は後円部周縁に4トレンチ、後円部中央断面に1トレンチの合計5トレンチを設定して調査を進めた。なお、トレンチの名称は昨年度調査分を通算して調査順に4~8の番号を付した。

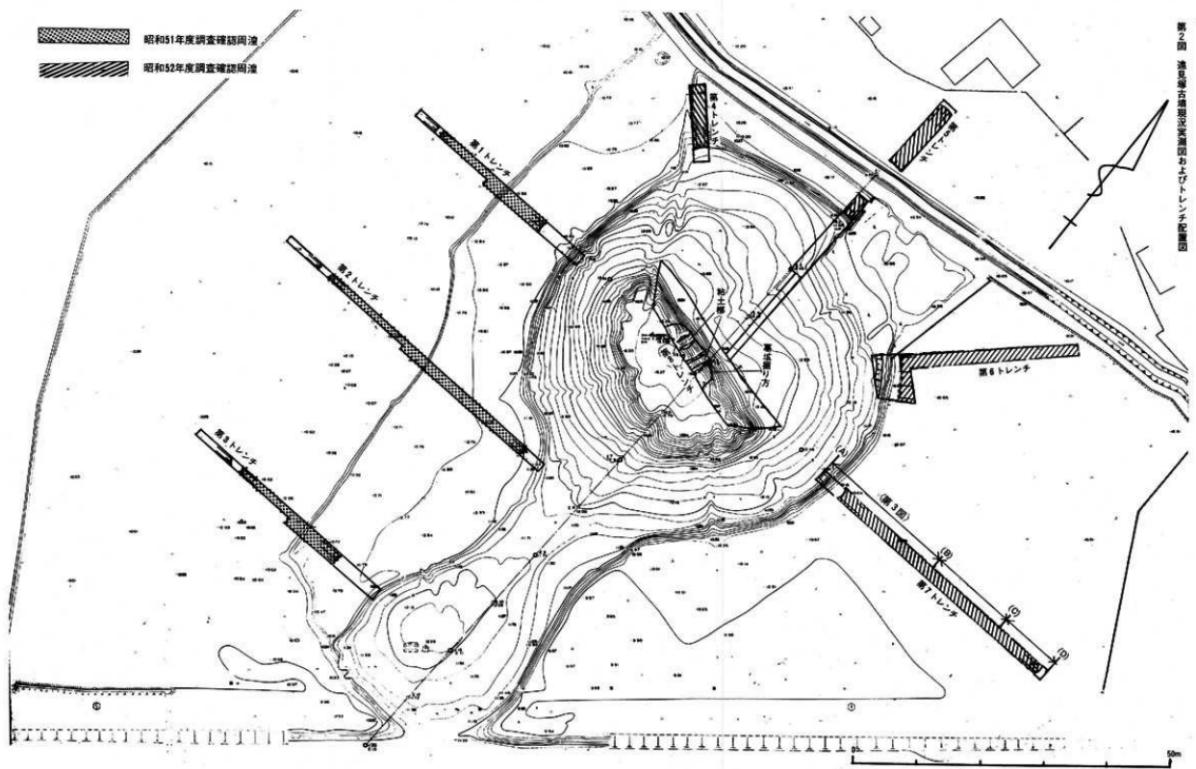
#### (イ) 後円部をめぐる周溝の状態について

4~7トレンチでもって後円部周縁の周溝の確認をめざした。各トレンチは、後円部中央を中心として放射状の配置となっている。

第4トレンチは後円部北西縁辺に設定されたものである(13m × 3m)。ここでは、周溝内縁はトレンチ南辺から2.1mで確認されたが、外縁は確認できず、さらに外側に伸びるようである。なお確認面は暗黄褐色シルト層面である。また周溝内縁よりも南側つまり墳丘よりの部分は從来墳丘部分と考えられていたが、深さ150cmで地山層に達するまで積上もしくは古墳築成に関する堆積層が確認されず、後世の人为的盛土と覺しき土層が覆土していた他、埋上から古墳築造に直接関連するものとは思えないピット類も確認され、後世の人为的な変造を思わせた。なお、周溝は内縁付近でやや急傾斜で80cmほどおちこんだあとは比較的なだらかな底面を形成し、最深部では130cmの深さで昨年度推定したような状況とちがった様相を示している。また一部深掘りした部分で、周溝底面下100cm付近の灰白色粘土質シルト層中にて縄文式土器（後期もしくは晩期）の一括出土を見たが、最近沖積地における縄文後期の生活文化層が確認されはじめており、遠見塚古墳形成以前に縄文土器の包含層の存在の可能性を示すものとして注目される。

第5トレンチは後円部北側に設定されたが、中央部を農道や堀などが走っていたため中央を分断された形のトレンチ配置となってしまった（A区6m × 3m、B区12m × 3mの

第2図 滝谷遺跡古墳群調査図(よひケンチク)



他 $10\text{m} \times 1\text{m}$ 南側に拡張)。トレンチA区南辺より $2.8\text{m}$ で周溝内縁を確認した。これは、従来墳籠と考えられていた壇の裾の部分とほぼ一致する。しかし壇の部分からは、第4トレンチ同様積土は確認されず、新しい盛土の形跡が認められたのみであった(厚さ $100\text{cm}$ )。このためA区の南にトレンチを拡張して積土の確認に努めた結果、A区南辺の南 $1\text{m}$ 付近の表土下 $80\text{cm}$ で積土が認められ、墳丘縁辺にのみ新しい盛土がなされていることが判明した。周溝外縁はB区北辺から $12.2\text{m}$ で確認された。よって後円部北側での周溝の幅は $22.5\text{m}$ であることが判明した。深さは内縁部で $70\text{cm}$ 、外縁部で $70\text{cm}$ 、中央部付近で $70\text{cm}$ で、第4トレンチ同様ほぼなだらかな底面を形成するようである。

第6トレンチは後円部北東方向に設定され、周溝幅ならびに墳籠線の状況の把握を目標とした。トレンチは、墳籠部は $8\text{m} \times 6\text{m}$ の長方形に、そしてさらに北東方向へ $28\text{m} \times 2$

$\text{m}$ の細長いトレンチを配した。調査の結果、墳籠線は現在の壇の裾の線とほぼ一致し、壇の肩は4、5トレンチ同様後世の盛土がされている(厚さ $80\text{cm}$ )ことが判明し、周溝内縁の線なども確認されたが周溝外縁の線は確認できず、さらにトレンチ外へ周溝がのびていることが考えられる。つまり、今回の調査範囲内では、後円部北東部での周溝幅は $28.5\text{m}$ 以上に達することになり、昨年度予想した馬蹄形の周溝とはちがったものになるようである。深さは、内縁部で $0.6\text{m}$ 、最大部で $1.2\text{m}$ で底面はほぼ平坦である点などは4、5トレンチと類似する。

第7トレンチは、後円部東部に当初 $35\text{m} \times 2\text{m}$ のトレンチを設定して周溝幅の確認に努めたができなかつたため、トレンチをさらに $12\text{m}$ 東側へ拡張した結果、トレンチ東端から $1.1\text{m}$ 付近で周溝の外縁を確認、周溝内縁はトレンチ西端から $4.2\text{m}$ 付近(現墳籠の東 $1.3\text{m}$ )で確認されたので、結局後円部東部での周溝幅は $41.8\text{m}$ にも達することが判明した。深さは $60\sim 100\text{cm}$ で底面はほぼ平坦で、今回調査の他トレンチとほとんど同様の状況であった。墳籠の壇に近世以降と思われる盛土層がここでも発見された(厚さ $90\text{cm}$ )。

写真3  
第6トレンチ調査全景



写真4  
第7トレンチ周溝内縁部



写真5 後円部断面表土排除風景



写真6 粘土堆積出状況（北から）



写真7 粘土堆積出状況（右、東側）



以上をまとめてみると、今回確認された周辺は第5トレンチで幅22.5mとほぼ昨年推定通りであったが、第6、第7各トレンチではこれを大幅に上回る幅のものとなり、昨年推定した馬蹄形の周辺と考えることはできなくなった。深さも全般に1m前後で底面平坦である点で共通しており、昨年部分発掘によって第1、第2トレンチで3m以上と推定したが、これは今回4~7トレンチ同様1m前後と訂正しておく。従って第3トレンチのみは断面形態および深さの点で他のトレンチの状況と異にすることになったわけである。今回もう一つ指摘できる点は、後円部墳籠部付近が多分に近世以降の変造を受けていると認められる点である。これは4~7各トレンチで厚さ1m前後の近世以降の盛土層がなされていてことから推定され、遠見塚古墳の形態そのものが、詳細に見れば当初の形態と現状とはかなり異なる様相を示すことになるかもしれない。

#### (口) 後円部中央断面の所見

調査は、①埋葬施設の残存状況、②墳丘の築成状況などを主たる目的として、昭和22年に土

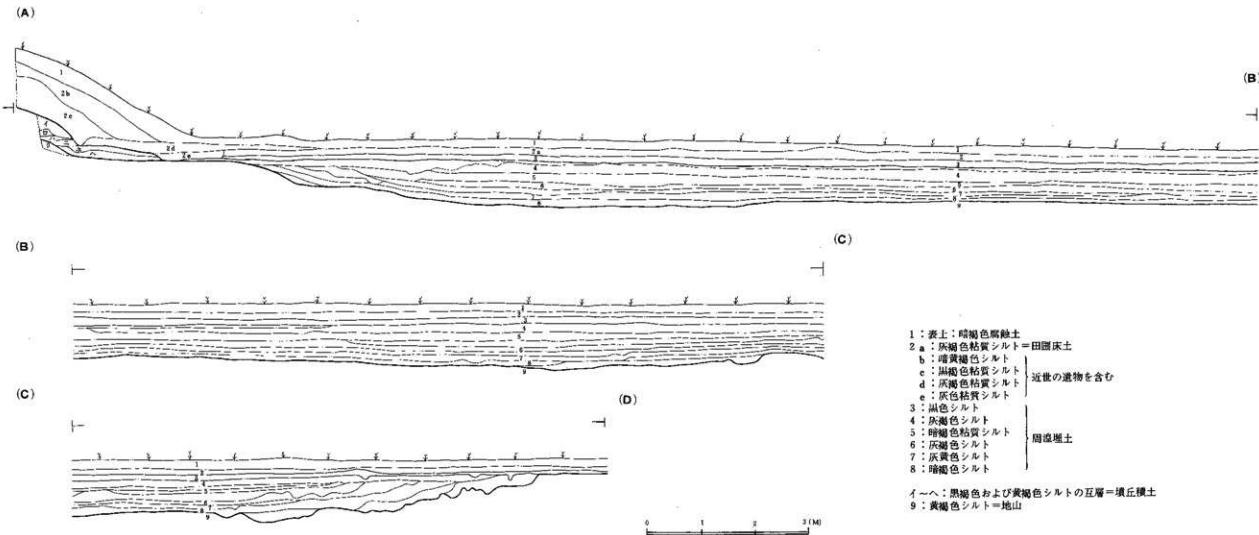


写真8 東側粘土桿



写真9 西側粘土桿



取りの為に削りとられた後円部の中央断面を調査した。

調査の結果、後円部中央で墓拝内に設置された2基の粘土桿を確認した。なお残存する粘土桿の全容の検出および粘土桿内部の調査は将来の調査に待つこととし、今回は実施しなかった。

(1) 墳丘は上段の北半分が削り落とされているため、粘土桿は東、西両桿とともに北半分はすでに失われている。また、今回調査した部分の南側半分では、木棺の上方をおおったと思われる粘質土が残存しているが、北側半分では木棺の上方の被覆粘土は失われ、下半の灰白色粘土が残存している。

(2) 東、西両桿の間には、径15cm前後の河原石を並べた部分があり、

上面に朱をぬっているものが1個認められた。

- (3) 墓拝内は粘土桿の上方において人為的攪乱をうけており、攪乱は東側粘土桿の上面、河原石敷の東側半分、西側粘土床の直上まで達している。
- (4) 東、西両桿の時期的前後関係については、前述した攪乱のために明らかにしえなかった。
- (5) 粘土桿の構築方法は、墳丘を造りあげた後で墓拝を掘りこみ、さらに粘土床部分を掘りくぼませた上に設置されていることが判明した。
- (6) 古墳の現墳丘最上部から粘土桿上面までの深さは東桿で1.3m、西桿で0.8mを計る。東、西両桿とともに基底面のレベルはほぼ同一であり、いずれも床面は北側にやや傾斜している。
- (7) 桿内からの出土遺物としては、西桿被覆粘質土中より出土した鉄製クギ1点のみである。ただし、この出土部位付近も攪乱がはげしく、粘土桿に伴うものであるかについては断定できない。
- (8) 粘土桿構築過程の概要

今回の調査で判明した粘土層構築過程の概要を記す。各部位の測定値は主に墳丘断面の観察による。

① 墳丘をつくりあげた後に墳頂より墓拵を掘りこむ。

墓拵の断面形は逆台形状である。墓拵の上幅は約11m(推定)、下底幅は約10m、墓拵確認面から下底までの深さは約1.2mを計る。

② 棺床を設置するために墓拵の底面を浅くU字形に掘りくぼめる。

東櫛では上幅1.9m、底面幅1.55m、深さ20cmを計る。西櫛では上幅1.55m、底面幅1.4m、深さ20cmを計る。

③ 粘土をU字形の掘りこみに応じて敷く。

粘土は灰白色でよくしまっている。粘土の厚さは東櫛で約10cm、西櫛で約7cmを計る。

④ 木棺をのせる。

東櫛の灰白色粘土の上面は垂直に近い壁の立ちあがりをみせ、底面は中央部を中心としてゆるやかにくぼんでおり、木棺下部の形状を示している可能性が強い。東櫛木棺底部の推定幅は95cm~1mである。東、西櫛の調査区の北半分の灰白色粘土上床上面には、厚さ5mm前後の黒色有機質土の付着が認められた。木棺に由来する可能性がある。

⑤ 木棺を粘土質シルトでおおう。

東、西両櫛の確認面の南半分には木棺をおおったと思われる暗黄褐色シルト質粘土が残存している。東櫛では下部の灰白色粘土に対応して約15cmの厚さに堆積している。西櫛では、擾乱による凹凸がはげしく、内部堆積土中には灰白色粘土ブロックの混入が認められる。

⑥ 東、西両櫛の間を埋め、上面に河原石を配列する。

灰白色粘土層をはさんだ土で東西両櫛を埋め、灰白色粘土(厚さ約5mm)の上面に径10~20cmの河原石が敷きならべられている。上面を朱の付着した石が1個認められる。

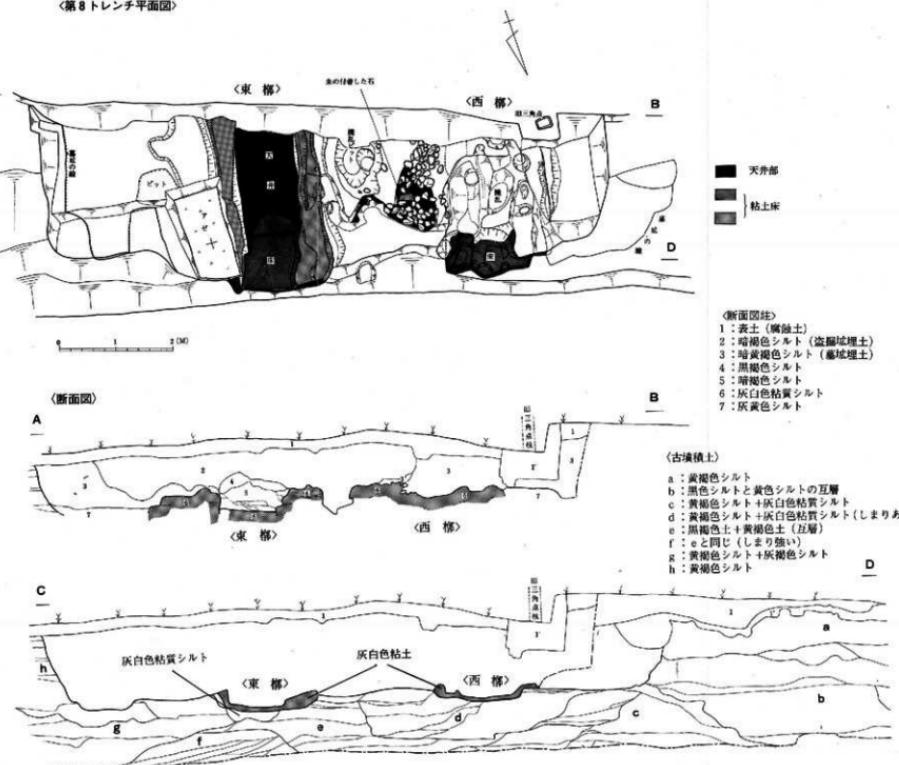
⑦ 墓拵を埋めて埋葬を完成する。

河原石の敷いてある面は墓拵底面から60cmほど上であるが、このレベルにおいて、東櫛東方、西櫛四方にもこれとほぼ対応する層位面がある。この面は褐色に酸化されており、この面が粘土層構築過程における一つの面を形成していると考えられる。尚、東西両櫛の構築の前後関係は明確にとらえることはできなかった。

#### (9) 墳丘積土の様相

墳丘積土は、黄褐色シルト・灰白色シルト・黒色シルト等の互層によって積みあげられほぼ水平に近い堆積を示す。層の厚さは薄いところで約10cm、厚いところで約80cmと一定しない。

第4図 後円部積丘断面縦出粘土被実測図



積土の様相において特徴的なことは「積み手」の違いが観察されることである。即ち、ほぼ水平に堆積している互層のまとまりの間に明瞭な不整合線が観察される。ただし、東西の1断面における「積み手」の違いによって墳丘築成の具体的な過程にふれることはむずかしい。

#### (八) 出土遺物について (第5図、写真11)

今回の調査で出土した遺物の総量はダンボール箱(ミカン箱)で3箱分である。そのうち土器類が9割以上を占め、石器類、鉄製品、布目瓦などが各々若干含まれる。

##### A. 土器類

土器としては、縄文土器、弥生式土器、土師器、須恵器、中・近世陶器がある。特に弥生式土器が多く、しかも、ほとんどが小破片である。

###### a. 縄文土器 (第5図1)

第4トレンチ周辺底面下、白色粘土質シルト中から出土した体部以下の半壊品が1点ある。底部径約8cmで、やや内湾しながら体部に至る深鉢形の土器である。残存器高は20cm弱である。体部には斜行縄文が施され、それを横に切るように燃系施文が5cm位の間隔で2条見られる。輪積み痕どおりに横方向の割れ口を示し、内面は指で整形してある。施文原体はLRで、縄文後期以降のものと思われる。その出土層位は、完全に崩落底面下であるので、古墳築成以前に、縄文後期もしくは晩期にまでさかのばる生活面があったと考えられる。

###### b. 弥生式土器 (第5図2~13)

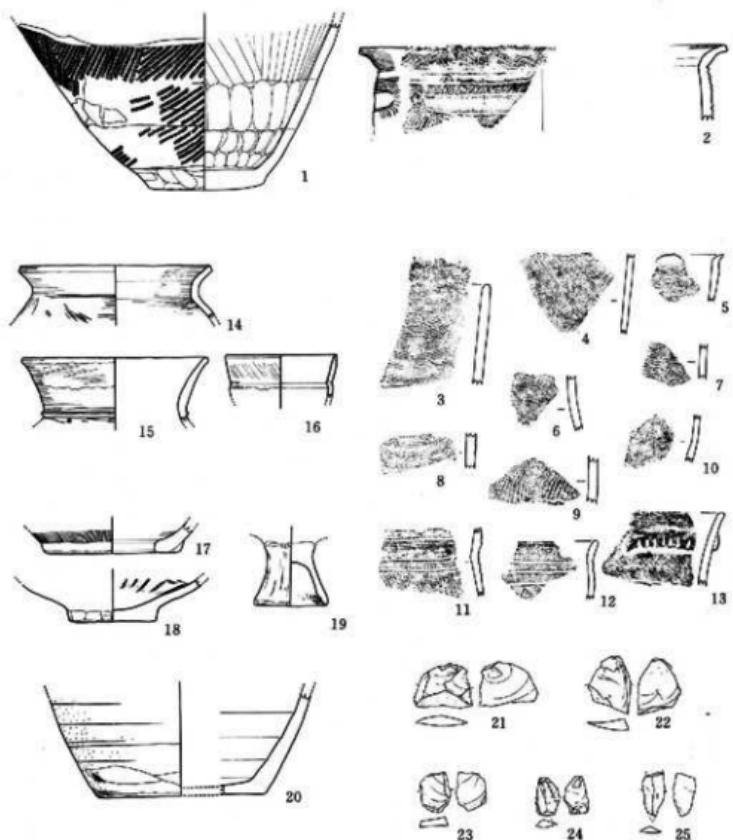
出土量は一番多いが、小破片が多く、器形を復原できるものは少ないが、壺、壺、鉢などがある。ロクロは使用されておらず、ほとんどが節の細かい縄文を有しており、火をうけた痕跡があるものも見られる。

〈壺〉体部破片に平行沈線、縄文、すり消し縄文が組み合わされているグループ。この中には沈線を境として、縄文が施文されている部分とすり消されている部分が交互に配置されているものと、やはり沈線で区画されたもので、縄文と擦り消しを交互にくりかえすものがある。また、直線的な平行沈線と波状沈線が山形に配置されたものがある。沈線の数には3本と2本のものとある。

口縁部破片をみると、長さ短かく外反するものと直線的に開くものがある。口縁部の縄文施文は、口唇部にもまた内面にも見られるものがある。

〈鉢〉文様的に直線沈線は上記のものと類似するが、波状沈線との組み合せでないものがある。前記の直線も、このグループでは若干の弧を描く沈線であり、これらも2本、3本ずつ組む山形の施文となる。これらの体部文様は、口唇部はもちろん内面口縁部に及ぶも

第5図 出土品実測図



- |                       |                         |
|-----------------------|-------------------------|
| 1 : 繩文土器              | 17 : 土師器蓋〈底部=焼成前穿孔〉=塙釜式 |
| 2 : 弓生式土器(大泉式)        | 18 : 土師器蓋〈底部〉           |
| 3-13 : 弓生式土器拓影        | 19 : 土師器高杯〈脚台〉          |
| 3-10 : 樹形器式、桜井式       | 20 : 須恵器蓋〈底部〉           |
| 11-15 : 大泉式、13 : 天王山式 | 21-25 : 石器フレイク          |
| 14-15 : 土師器蓋〈口縁部〉     | 26 : 鉄製刀子               |
| 16 : 土師器不             |                         |

のも見られる。そして、器面全体に細かい繩文が施文されることが多い。

このほか、昨年度は発見されず、今年度の調査で新たに発見されたものとして口縁部片に粘土をはりつけ、指頭状の圧痕文を施文したものがある。甕の破片の可能性もある。

全体的な特徴としては、胎土に石英粒や砂粒を含むこと、朱塗りのものが見られることなどがある。

土器型式は、大泉式、桜井式、桜井式、天王山式などである。

#### c. 土師器 (第5図14~19)

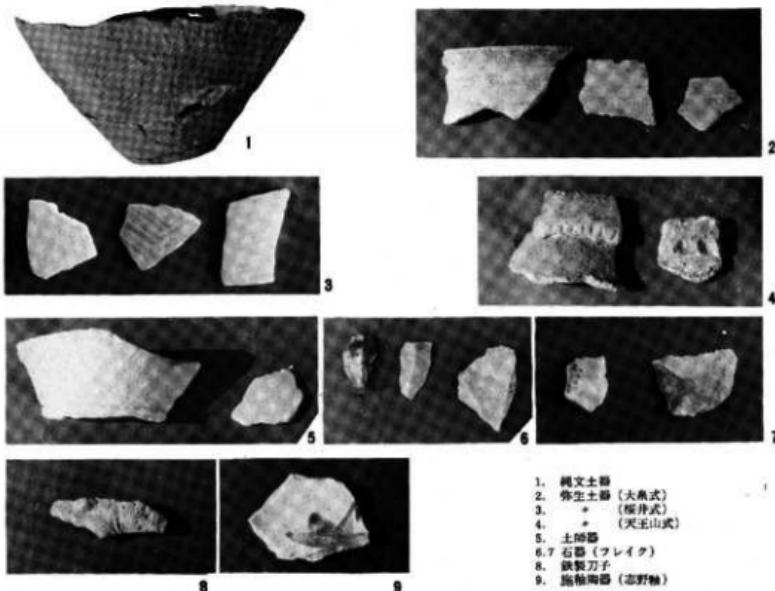
総量において少なく、その上、小破片なので、器形についてははっきりしたことを言うことができないものが多い。

##### ① ロクロ不使用の土器

〈脚台〉 (図19) 高さ 4 cm位の脚台がある。器面は風化してその調整はわからない。薄手であり、脚の開きは小さい。器色は橙赤色である。

〈壺〉 底部破片は、底面径約 7 cm、ヘラ削り痕が見られる。底面で段がつき、体部が球形を呈す。体部寄りの方に、はっきりとした横方向のハケ目痕が若干見られる (図18)。丸底風の底部

写真  
10  
遺物  
写真



1. 繩文土器  
2. 弥生土器 (大泉式)  
3. \* (桜井式)  
4. \* (天王山式)  
5. 土師器  
6.7 石器 (フレイク)  
8. 鋼製刀子  
9. 施釉陶器 (志野物)

片もある。

また、口縁部が直立ぎみにやや外反し、体部との境近くに断面三角形の隆起がめぐる破片がある(図15)。口縁部の形態にもう一種見られる。短い口縁で外反するものである。内外面ともハケで調整されており、頸部にはやや明瞭なハケ目痕を残す。(図14)

〈壺〉外方向に直線的に立ちあがる口縁部の口頭部において「く」の字形にくびれ、球形にふくらむ体部を有する小形の壺である。底部は不明である。器厚は3mm前後である。色調は灰褐色で焼成は良好。内外面とも全体にミガキがあり、口頭部にケズリがある。(図16)

〈その他〉主体部の一部調査で出土したものの中に、朱塗りの土器片が4点見られる。器形ははっきりしないが、底部片から判断すると壺の一部と思われる。表面には全体に細かい刷毛目が施され、一部裏面に及ぶ破片もある。底部破片が1点見られたが、短かく直立した後外側に大きく屈折して開く。底面は焼成前の穿孔が施されている。孔径は6cmほどである。(図17)このような焼成前の底部穿孔の例は現在まで、県内では名取市今熊野遺跡方形壇構築出土の壺の他1例があるのみである。(東北歴史資料館藤沼邦彦研究員の教示による。)

以上の土器型式としては、丹塗りの土器については塙釜式と考えられる他は、ほぼ南小泉式のグループに属する。

#### ② ロクロ使用の土器

内黒のロクロ痕のある土器器壺破片が若干含まれる。

#### d. 須恵器(第5図20)

須恵器も若干量であり、器形は、壺、甕、壺がある。ロクロ使用がはっきりしているものとそうでないもの、表面、裏面にハケ調整痕があるもの、甕体部片と思われるものの表面に、細い“スノコ”状叩き目痕を残すものがある。

#### e. その他の

中世、近世陶器と見られるものとして、素焼きのもの、茶褐色の釉のかかっているもの、鉄絵のある志野釉の碗と思われるものなどがある。器形としては、鉢、甕、壺、灯明皿の破片がある。

半瓦片も1点出土している。表は粗布痕、裏は粗い網目叩き痕を有する。厚さ約3cmで、側面にはヘラ削りの面取りがなされ、粘土中には砂粒を多く含む。

#### B. 石器類(第5図21~25)

出土物の多くはフレイクで、その他、若干のスクレーパーがあり、小形のものがほとんどである。定形石器はほとんど発見されなかった。石質は色々あるが、チャート(珪岩)、頁岩、黒曜石などが多い。

#### C. 鉄製品(第5図26)

出土は少量である。はっきりしているものは、長さ約5cmの刀子である。これは第6トレンチの墳丘裾部で発見された。その他のものとしては、後世の時期のものと思われる鉄釘、定規状の鉄板がある。

#### 4. まとめと考察

今年度の調査は、古墳北～東周辺部の周辺の状態および昭和22年に土取りのため削除された後円部中央断面の観察を目的とした。

- ① 昨年度（昭和50年度）においては、古墳西側を重点的に調査し、その結果、後円部、前方部西側においては幅20mほど、くびれ部では幅40mのもので、深さは前方部西側で4.3mであって、その他においては部分発掘のため確定しなかったが、以上のようなデータから判断して周辺は古墳周縁を幅20mほどでいわゆる「馬蹄形」にめぐるものではないかと想定された。しかし、今年度調査の結果では、後円部北ではほぼその想定どおり22m幅の周辺を確認したが北東ならびに東側ではいずれも幅28m以上、42mと予想以上の幅広いものとなって形態的に不規則な形態の周辺となることが考えられる。周辺の深さおよび断面形態は、内縁および外縁において一定の傾斜（30度前後）をもつ以外は底面はほぼ平坦で、深さ1.5m前後の長い逆台形を呈するものであって、昨年度調査の前方部西側において深さ4.3mにも達する舟底形を呈する周辺はむしろ局部的現象であって異質なものと考えるべきである。
- ② 墳體部には、いずれのトレンチにおいても後世の攪乱、盛土などが認められ、近世以後の遺物も含まれている。従って古墳西側の遺跡も含めて墳體全般にわたって近世以後改変がなされていることが明らかであり、今後、墳形、規模の判定において現在の状況と異ったデータが提示される可能性をもつ。
- ③ 後円部中央断面の精査では、2基の粘土櫛を再確認し、その位置等について観察する機会を得た。この粘土櫛は昭和22年の土取りの際にも伊東信雄氏によって確認されてはいたが、土取り進行中の観察のため詳細な測量図などは公表されておらず、粘土櫛自体、果たして残存しているかどうか最も危惧されたが、今回の確認時の所見では、近世以降の盗掘坑などが粘土櫛の直上付近まで及んでいたが、全般的に粘土櫛自体の保存は良好であった。粘土櫛は東西に2基、軸線方向に平行に並んで確認された。2つの粘土櫛は墳頂から掘りこまれた幅11m、深さ1.2mの基盤の底面に粘土床を貼りつけたような状態で作られた。粘土床の厚さは10cmほどで粘土床の下に特に関連する施設は見られなかった。粘土床の間に河原石（朱塗りのものを含む）を敷き並べた部分があった。このような観察はいずれも断面の観察のみによるもので、どのような広がりをもつかは不明で、従ってその性格および全体的な構造などについて判定することは困難である。しかし、その構造的な面では西日本の例などと比較

すれば、基本的には特に異質な面は見られず、むしろ同様な構造をとっているが、例えば粘土床の下に排水用と見られる跡をつめるとかいった入念さは見られないようである。

- ④ 出土遺物としては、総体的には昨年のような状況と変わりはないが、その中で注目すべき点としては、(イ)周辯底面下の層で縄文土器が発見され、古墳築成以前に縄文時代にまでさかのぼりうる生活面があると考えられること。(ロ)弥生式土器は新たに天王山式、土師器でも新たに塩釜式に属すると見られる土器の出土があり、弥生時代～古墳時代前半に至る一連の土器型式がそろったこと。(ハ)特に粘土層周辯からは底部穿孔の朱塗土器の破片が発見され古墳築造に直接関連する遺物として注目される。(ニ)中・近世陶器の出土も目立った。

## 仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然紀念物山蟹 ドセコイヤ化石林調査報告書（昭和39年4月）  
第2集 仙台城（昭和42年3月）  
第3集 仙台市燕沢善光寺横穴古墳群調査報告書（昭和43年3月）  
第4集 史跡隆奥四分尼寺跡環境整備並びに報告書（昭和44年3月）  
第5集 仙台市南小泉法鏡塚古墳調査報告書（昭和47年8月）  
第6集 仙台市荒巻五本松塚跡発掘調査報告書（昭和48年10月）  
第7集 仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）  
第8集 仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）  
第9集 仙台市根岸町宗禪寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）  
第10集 仙台市中山町安久東道跡発掘調査概報（昭和51年3月）  
第11集 史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）  
第12集 昭和51年度史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）

---

## 仙台市文化財調査報告書第12集

昭和52年度

### 史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報

昭和52年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市西区分町3-7-1  
仙台市教育委員会社会教育部

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市立町24-24 TEL 022-668-09

---



支那の書